

40年来の友人が、環境展を開くというので、わたしも上京して手伝うことにした。彼女の仕事を尊重する自分としては、たった半日でもよろこんで裏方をしたかったので、定刻の一時間前に開場にはいるべく準備をした。展示用グッズの買い物もたのまれ、大き目のバックパックを背負って都内の目的地にむかった。

ところが、持病の方向音痴がまた再発して、電車の乗り換えのとき、ホームの反対側に滑りこんだ逆方向の特急に乗ってしまい、気づいた時点で降りるに降りられず、思いがけなく遠い駅まで行ってしまった。

当然、定刻どころか、開場一時間後にも間に合わず、汗だくで到着したわたしを見た彼女は、いきなり大声で「バカ・まぬけ・あほ！」と叫んだ。

わたしは一瞬、彼女の言葉が何語だかわからずに、ぼお一と立ちつくした。

それが、実は日本語で、「あなたは、バカね、それに大まぬけで、なんて阿呆なの！」だとわかったとき、なんともいえない懐かしさをおぼえた。

夫婦喧嘩では、そんな抽象的な表現は使わないし、最近の友人関係では、当たらずさわらず、概して軟弱、うわすべりな言葉が多く行き交う。

世の中も、禁止用語・差別用語の標識が乱立して、うっかり本音を言うと、こちらが差別されかねない。差別って、そんなに軽いものだったのかと愕然とする。

人と人が、根っこのところで繋がっていないから、会話言葉にだれもがぴりぴりしているのだ。そのうち、ロボットが発する言葉のほうが無難で安全だと、教えるかもしれない。

何事もなかったように展示をいそぐ彼女の背中を見て、わたしはこの人と繋がっていると、実感できた。

帰り道、わたしは真剣に数えた。喉元で凍りついた「ばか・まぬけ・あほ！」を、いったい何人の友人から受けとめられるか、そして、いったい何人の友人に発せられるだろうか、と。